カバラン二六〇〇／Travels in Kavalan(Yilan), Taiwan 1940

松尾 寛 編著

GINSEISHA,JAPAN

カバラン二六〇〇

朝一番に花蓮港を出発した乗合バスは臨海公路を走り有名なタッキリ渓（太魯閣渓谷）を経て進む。断崖絶壁を開削した道路はまさに「華陽国志」の蜀道に劣らぬ壮絶な景色で、バスが揺れる度に隣の爺婆は法華経を唱えヒヤヒヤ、ヒヤヒヤ。ようやく昼過ぎに蘇澳に至る。蘇澳は小振りながらも天然の良港であり港は大小船ビッシリとまるで和歌（浦）や大浦のよう。豆腐岬という変わった名前の地名があるのも面白く、漁業商業に妓業もさかん。蘇澳は元々支那人蘇氏が開拓したためその名があると云うが、実際は沖縄人も多く開拓し沖縄部落も多い。開拓当初、蘇澳の蕃害は鬼来迎の如く酷いものであったが、改隷（日本統治）後その蛮風も漸々消滅し、今や蕃人は性温厚にして台湾善民の鑑と賞されるようになった。殊に宜蘭蕃女遭難之件（※昭和十三年十月に蕃人の少女が日本人警察官の荷物運びを手伝っている最中に沢へ転落し死亡した事件を指す。このエピソードより『サヨンの鐘』という宣伝映画がつくられた）はその最たるもので、総督府や新聞社は模範蕃婦などと持てはやし美談に仕立てたが、元はと云えば猛雨のさなかに無理やくたに徴用され命を落とせられたのだから酷い迷惑である。彼女の父兄には数百円の見舞金が寄せられたが、これを妬む輩あり、蕃女某は実は醜女である淫婦であるのとけしからん噂を云いふらしている。婦女の生命貞操を汚すウソイツワリ奸悪な不逞の輩はよろしく北海道か樺太の監獄にでも放り込むべきである。

蘭陽（※蘭陽は現在の宜蘭県一帯を指す）でも蕃地視察はさかんで、特に蘇澳の南北に蕃社多く、途中トロッコや轎に乗り換えて視察することが出来るのである。紀陽（※和歌山を指す）と同様各地に温泉の多い処で、内外に著名な礁渓温泉をはじめ多数の温泉あり。蘇澳には天然温泉と炭酸水製造所があるが、何でも井戸を掘ろうと試みたところ多量の炭酸水が出てきたのだと云う。建物に装飾を施せば忽ちトレビの泉に勝るとも劣らぬモダン台湾八景となるであろう。一杯飲んでみたところ甜く旨く、経営者は何と和歌山出身であると聞く。

午後遅くに蘇澳を発ち夜前に宜蘭に到着し一泊、又礁渓温泉で一泊（※蘇澳から宜蘭に行く途中に製材業で繁栄した羅東という町があるが、こちらには立ち寄らなかったようである）。宜蘭は元々五囲と云い、蕃害を防ぐため囲のある町であったが、南洲公御子息（西郷菊次郎）が本格的に建築し比較に繁栄している処であり、中ではカトリックや天理教の坊主が楽器を鳴らし益々賑やかである。近辺は霊泉多く、カタルを治す霊水も有ると云う。軍人は見ない。ただ一つ気に食わぬ処は、百貨店妓楼一つ無い土気の田舎町に過ぎぬのにグレート宜蘭と称し市制を施行せしめんとすることである。夜は比較に閑散としているが、これは近くに礁渓温泉があるから致し方ないことである。

宜蘭の名物は、或る者は家鴨と云い、有る者は肉羹と云い（※肉のすり身を使ったスープ。淡水の魚丸湯、新竹の貢丸など台湾各地にみられる料理である）、或る者は寿司と云う。蘭陽は稲作盛んで内地よりも安くて旨い米があると云う。内地では精動（国民精神総動員の略語）ヒステリーが跋扈し、ヤレぜいたく禁止だヤレ白飯禁止だヤレ日の丸弁当だと云う為に、米搗棒や南部岩代の梅干やらが矢鱈流行っていると云う。阪急百貨店では寿司の提供を辞めたとも云い、内地では最早白飯は鱈腹に食べられないぜいたく品なのである。リクリクカイカイカ

ントー軍の輩は支那との戦争に碌に勝てもせぬ癖に東亜秩序を遠吠える体たらく、そして自ら贅沢三昧の癖に自分らに節約を強要するのだ。精動の輩もかくのごとし。このやつばらこそまさに勦滅すべき兇悪の病巣である。忌々々々糞喰らってしまえ。米が食べたくなったので近所の洋食屋でオムライスとライトを頼むが、オムライスの中味はビーフンであった。夜遊びせず。

自分は宜蘭に親しき知合いもなく只の過客に過ぎぬのであるが、この日の宿は自分以外の客が居なかったことから、宿に居る沖縄出身の雇人が話しかけてきた。身上話を聞いていると男は元々糸満の奴隷（糸満売り）で年季が開けて台湾に出てみたものの、蘇澳で足疾となり帰る処もないものだから此処に住み込みで働いているのだと云う。まだ若く、相当に悲惨な人生を送ってきた筈であるが、全く屈託のない男であった。男は過去に和歌山の人間を泊めた時に南紀に小タッキリがあると話してきたので、それは恐らく古座か奇絶峡のことであろうと答えた。宜蘭の名所を訊いた処、町内に公園が、山中に温泉があると云う（※員山温泉のことか）。温泉は宜蘭よりやや遠く、繁栄を礁渓温泉に取られているからその分サービスも好いのだと云い、ついでに朝鮮人参を売っている薬局まで教えたものだからやや露骨に思ったりしたが、恐らく他意はないのだろう。

ところで李香蘭は実は日本人であると云う出所不明の噂で盛り上がった。男によると李香蘭は支那顔に非ず日本人であると云うのだが、自分は諸葛丞相を日本人と信じるのと大差ない噴飯ばなしと思う。それにしても李香蘭は満支の怪女である。どのように取り入り出世したかは皆目判らぬが、膀胱カタルの関東軍の輩は李香蘭に尽とごとく鼻毛を抜かれているのだから凡そ男とは皆助平なのであろう（※先述した宣伝映画『サヨンの鐘』は、くしくも李香蘭が主人公をつとめているが、この時点では知る由もない）。

朝、時間があったのでぶらぶら散歩するが、宜蘭は小振りながらも仲々味のある町で、内台雑居し、官庁銀行も多く、中央市場の構えは仲々立派であったが中は入組んでいてまるで七曲（※和歌山市の七曲商店街）の如く。まだ早い時間なのにはなはだ暑かったのでアイスクリームを買う。

公園で首塚を眺めていると、みすぼらしげな風体の支那服を着た老翁が日本語で話してきた。自分は清国□□年（※「同治七年」と書くつもりだったと思われる）即ち明治元年の生まれと云い、首塚を指差しながら、若い頃に顔に入墨を入れた荒くれ蕃人に殺されそうになった話と、今は日本帝国の高徳により安心して宜蘭に住むことができるという話をしはじめた。何やら警察の誘導尋問の手口に似ていて薄気味悪かったので、余計なことは一切云わず、長生の秘訣は何かと当たり障りのないことを訊くと、五日に一度天麩羅に砂糖を掛けて食べることだと云ってそのまま去っていった。

昨今の本島人は外でも家でも国語を話すのを誉とし、本島人の勤勉ぶりを褒めたたえるが、実は彼らの行為は何も日本帝国の高徳に依るものではけしてなく、総督府は単に国語を話す本島人に種々の便宜恩恵を与えているに過ぎないのであるから、要するに功利によるものである。

昼前に宜蘭を発つ。礁渓は宜蘭より汽車で僅か二十分の距離にあり、汽車の本数は比較に多い。乗合バスに至っては一時間に一本。温泉は駅前にあり、まことに至便。立地は南紀白浜に似ていて、宜蘭線が全通してから基隆台北から鉄路一本で行ける距離にあるのだから、都会の金持ちが出張や慰安と称し女護温泉の看板めがけて多額

の金を落としに行くようになり、駅前には客寄せの人力車がズラズラと並び、三鳳や萬華に勝るとも劣らぬ殷賑振りで壮観。（宜蘭の）旅館で聞くところによると、宜蘭は二十年前に庁を廃され台北州の一部に吸収されたため、台北の本庁に御伺を立てる宜蘭役人、宜蘭を視察する台北役人の往来が日増しに増え、又台北役人は礁渓で接待されるため温泉も賑わっていったのだと云う。ならば宜蘭役人は北投に宿泊するのかと訊いたがそれは判らないと云われた。

楽園旅館に泊まる。此処の建物は当世風であり、女中は日本女本島女ばかりで蕃女はなし。まるで内地のよう。礁渓温泉は無味無臭の玉湯であり特に痔瘻に効くと云う。温泉に浸かり滝を眺め、夜は地酒を勧められ飲んでみたら支那酒の味がした（※宜蘭酒廠の「金鶏」のことか）。酒の肴に芸妓を呼ぶと、やって来たのは沖縄出身の愛嬌ある女であった。宜蘭界隈に沖縄出身は多いのかと訊くと、数はわからないが相当に多いと云う。自分は本島出身で、良人と羅東に出稼ぎに来たが、二年前に事故で亡くしてから、今は一人で礁渓にいる、子も居ないものだから、月に一度宜蘭へ買い物に行くのがただ一つの楽しみなどと云っていた。人前で唄うのは初めてだと云いながら女は李香蘭の新曲（渡辺はま子の「蘇州夜曲」と思われる）を披露して呉れ、自分はこの後日本に帰ることを話すと、今度はほれほれの替歌を披露せらる（※ハワイ日系人によってつくられた民謡「ホレホレ節」のこと）。異郷に聞く三味線のなんとも云えぬ哀しさよ。

宜蘭宜蘭とよーぉ　夢見て来たが
流す涙も　キビの中
行こかメリケンよーぉ　帰ろか日本
ここが思案の　台湾よ
那覇を出るときゃよーぉ　涙ででたが
今じゃ子もある　孫もある
今日のホレホレよーぉ　辛くはないよ
昨日届いた　里だより
（※歌詞は翻刻者の推測）

礁渓から基隆まで汽車に乗ること三時間。宜蘭や礁渓からは蕃地も遠く、見本蕃屋もなく、結局蕃人にも会えず仕舞いなのが勿体なく思う。蘭陽は平野が多く田圃と畑が交互に続き、支那町頭囲（現在の頭城）を過ぎた辺りから今度は海側に宜蘭大島が姿を顕す。又澳底は北白川宮殿下御上陸の地であらせられるが、御不幸にも上陸するや否や宮様はマラリヤに罹りコロリと薨去せられたのだった。そもそも南方は疫病の地で、和歌山でも熊野病と云う恐ろしい話を聞いたことがあるが、台湾のマラリヤはすでに絶滅したのだから、日本帝国の医学の力量は世界に冠たるものである。そうこうしている内に汽車は基隆港に着く。

船上から最後の台湾をつらつら眺めていると基隆山丘に壮麗な摩天楼があることを初めて知る（※許梓桑古蹟と思われる）。船を待つ為に基隆で二日も待ったが、こんなことなら礁渓にあと一泊すべきであったと思ったり、最近萬華界隈では男女の娼妓（※だんじょではなくおとこおんな、つまりおかまのことか）も居ると云うから一度冷やかしてみるべきだったと思ったりしたが、よくよく考えてみると台北には殆ど行ったことがなく、新聞や噂話以上のことは能く判らない。

いつの間にか台湾島は小粒になり見えなくなっていた。まさに一炊の夢の如し。それにしても自分はこの後大阪でO君・K君・喜多川君らと会ってこの顛末を話さなけ

ればならぬ。喜多川（※諦道。ジャニー喜多川の父親とされる）は僻地から高野山に出家しその後ツテを頼ってアメリカに渡りその地で出世したが、和歌山に居る頃から読経よりも婦女や小供と戯れることが好きで高僧など務まる訳はないと思っていたが、結局悪癖の末にアメリカを追い出され現在は大阪に居ると云うのだから、因果と云うべきだろうが、お互いの人生を笑い飛ばし合うのも面白いかも知らん。

ところで自分は今ここで平穏な台湾を去り和歌山に帰るのは空恐ろしいことであると思う。今日本帝国は支那と争っているが、またヒトラー氏がヨーロッパを解放せんと宣言した以上、今度は英仏にアメリカをも対手とするのは早晩逃れられないことであるし、自分らにも今後恐ろしい運命が待っているのだろう。日本は紀元二千六百年の御大典と浮かれているが、この大典は元寇の如くありとあらゆる災厄が訪れるセレモニーであり、向後三年五年十年二十年と災厄の宴は続くのであろう。自分は再び台湾にでも逃げ去りたいところだが、それも最早無理で、新豊の翁の如く腕の一つでも折って逃げること位しか思いつかないのだからまこと情けないことである（※白居易の詩「新豊折臂翁」からひいている）。

海の奥にようやく見えた小粒は、今度は九州や四国となって、新地の遣手婆の如く自分に薄気味の悪い手招きをしているようである。船は門司に着いて人が沢山降り立ちどこかへと散っていった。自分は神戸まで乗る。瀬戸内海は秋風索漠にして波静か。

（昭和十五年（一九四〇年）九月頃）

二十一世紀カバラン観光案内

台北の喧騒、台南の文化景観、そして花蓮の素朴な美しさに飽きてしまったならば、今度は台湾東部の宜蘭を訪ねてみるとよいでしょう。県都である宜蘭市は、羅東や礁渓温泉に囲まれていることもあり一見目立たない町で、観光客もさほど多くはありませんが、古今の台湾が創りあげた多元文化の雰囲気が色濃くあらわれていて、それはときにドラマチック、ロマンチックあるいはメルヘンチックに映ることでしょう。台北との往来も比較的便利で、高速バスに乗ればわずか一時間、仙台から山形市へ行く感覚に似ています。

宜蘭一帯はかつてカバランとよばれていました。カバランはこの地の先住民族の名前ですが、もともとフィリピンよりバシー海峡沿いにバタン諸島や蘭嶼を経て台湾に渡ってきたといわれています。また、カバラン族と同様に台湾に渡ったカレワン族やケタガラン（ケーラン）族の住む地域は、のちに花蓮や基隆とよばれるようになりました。

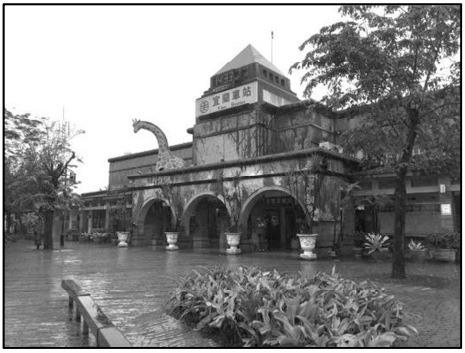
ところで、過去の日本人にとってカバランは比較的身近な存在でした。たとえば太平洋戦争中に公開されヒットした映画「サヨンの鐘」は、カバランに住む少女が日本人巡査の荷物運びを手伝っている最中に沢へ落ち死亡した悲しい事故を映画化したもので、この物語は当時の日本人の心を大きく揺さぶったものでした。また、当時のカバランでは異なる先住民族をつなぐ共通の言語は日本語でした。かつて彼らが話した日本語はその後も彼らの生活のなかに溶けこみ、宜蘭クレオールとして現在も用いられています。宜蘭クレオールは日本語を母語とする私たちにとって比較的容易に理解できる言語であることから、きっとカバランに親近感をおぼえることでしょう。このほか、宜蘭は沖縄から比較的近いことから多くのウチナーンチュ（沖縄人）が住んでいたことがあり、今でも注意深く確認すると、当時の沖縄の痕跡を見つけることもできます。

ところで、宜蘭観光の際にくれぐれも心がけておくべきことは、日本語はほとんど通じないこと、そして英語もさほど通じるわけではないことです。かつてのように町なかで軍歌を放歌しても袋叩きに遭うことはありませんが、バカヤローなどの罵声は時に相手に通じることがありますので注意が必要です。恐ろしい風土病はほとんどが根絶されていますが、生水は飲まないように。また、雨の多い地域ですので、雨具と体を拭くことの出来る大きめの手ぬぐいもお忘れなく。おすすめのお土産は老酒やウイスキーです。なお、説明が遅れましたが、下線部はなるだけ声に出してお読みください。

◇

宜蘭駅及び幸福バスステーション　宜蘭市は台湾随一のメルヘンチックな町として知られています。その契機となったのは、宜蘭駅一帯に台湾を代表する絵本作家ジミー・リャオ氏の幻想的なオブジェがパブリック・アートとして多数設置され、ＳＮＳを通して若いカップルの間で「聖地」として有名になったことからです。これらのオブジェはただかわいく緩いだけではなく、数々の示唆に富んでいます。たとえば、惹かれ合っているふたりがお互いの存在に気づくことのないまま通りすぎていくオブジェには「およそ人生にはたくさんの偶然があって、このふたつの平行線も重なることがあるかもしれない」

というキャプションが添えられています。宜蘭市のエントランスは、私たちの心の深奥に眠るせつなさを呼び起こさせる、人生に一度は訪ねるべき素晴らしい場といえましょう。住所：宜蘭市光復路一の二六〇四三（台鉄宜蘭駅正面より南側一帯には多数のオブジェがあります。）



石敢當　南方に行くと道路の突きあたりや角地などでよく見かけるのが「石敢當」とよばれる魔除けの石碑です。もともと中国大陸の福建が発祥で、台湾でも澎湖島でよく見られるのですが、宜蘭市の石敢當は比較的数が多く、調査では二十四柱が確認されております。詳しい来歴についてはつまびらかになっていませんが、家屋の新築や商店の開業に際して設けたものが増えていったものと思われます。日本統治時代、宜蘭界隈には多くのウチナーンチュ（沖縄人）が住んでおり、宜蘭市街にひっそりと立つ石敢當を眺めながら遠い故郷を思い出していたのかもしれません。住所：宜蘭市聖後街一五八／宜蘭市崇聖街四四の二（台鉄宜蘭駅から徒歩十～十五分程度、前者の石敢當は路地のなかにあります。）

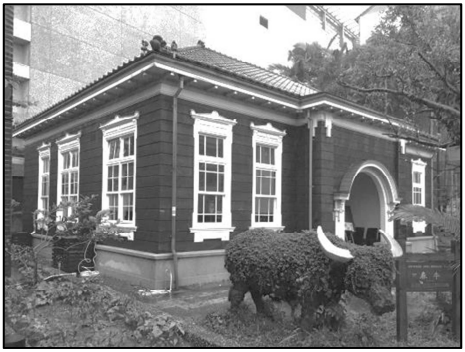
慶和橋津梅桟道　宜蘭中心部を流れる宜蘭川に架かる自動車橋・慶和橋の傍らには歩行者専用の桟道が架けられています。この桟道は台湾の現代建築家として知られる黄聲遠氏の作品で、橋脚の側面に楔を打ったかのように設けられた特徴的な意匠の桟道は、地元では天空歩道とよばれています。桟道の下に吊るされているブランコ遊びに興じる子どもたちの声を聞きながら桟道を渡りきると、今度は氏の設計による重厚なクラシック・マンションが独特な威容を誇っています。住所：宜蘭市同慶街九五（台鉄宜蘭駅から徒歩二十分程度）

宜蘭設治紀念館　宜蘭市内にある宜蘭設治紀念館は、日本統治時代の一九〇六年に当時の行政長官・西郷菊次郎氏（西郷隆盛の長男）が住む官邸として建設されました。氏は奄美大島の出身で、薩摩藩からの弾圧を身をもって感じた経験がその後の台湾統治の姿勢にあらわれたとされ、当時の反日匪賊からは恐れられ、また宜蘭の人士からは敬愛されていました。氏の住んでいたこの建物は平屋建ての日本家屋で、内部は段差が比較的少ないことが特徴ですが、これは氏が西南戦争で右足を切断した身体障害者であったことも無関係ではないと思われます。建物には文化住宅を思わせる洋間もあり、日本式庭園には楠の大樹が繁っています。記念館の周辺には宜蘭文学館や、次に述べる甲子蘭酒文物館・旧宜蘭監獄事務室など日本統治時

代の建物が集中していますので、見物の種に事欠かないことでしょう。住所：宜蘭市舊城南路力行三の三（台鉄宜蘭駅から徒歩十五分）

甲子蘭酒文物館　灘五郷や新潟など日本各地の酒蔵めぐりを趣味にされている方は、機会があれば台湾の酒蔵に足を運んでみるのも面白いでしょう。宜蘭市中心部にある宜蘭酒廠は日本統治時代の創業で、「金鶏」という老酒で知られていますが、併設する文物館は日本統治時代の雰囲気が色濃く残されている建物です。酒蔵建築の妙は、造作や細工がいちいち豪壮であり、仮にアルコールを一滴もたしなまない方であっても建物を眺めるだけできっと満足できることでしょう。ところで日本の酒蔵は、一般に北方では高いところに窓があり、南方に行くほど低くなるのが特徴です。一方、米蔵に窓はありません。さて、文物館の酒蔵の窓はどの程度の高さにあるのでしょうか？　このような特徴を認識しながら台湾の酒蔵巡りを趣味としてみるのも一興です。住所：宜蘭市舊城西路三

旧宜蘭監獄事務室　台湾では、かつて清朝から日本へ統治者が変更されたことを改隷と言い、また日本から中華民国へのそれは光復とよびならわしています。宜蘭監獄は改隷直後に台北監獄の支所として設けられましたが、光復後も引き続き監獄として利用され、監獄が郊外に移転されたのちも、洋風の事務室は見張塔とともに残され現在に至っています。ところで、宜蘭監獄事務室の建物は黒く塗られていて、はじめて見たときは一瞬ドキリとさせられるのですが、実際の色は爽やかな藍色で、二十一世紀に入り外壁が塗り直されたとき、透き漆の化学反応により黒く変色してしまったことによるものです。住所：宜蘭市神農路二の一一七（新月廣場の東側にあります。）



（令和二年（二〇二〇年）四月）

ご案内　「カバラン二六〇〇」は、令和元年（二〇一九年）十二月に刊行した「昭和丙子台湾屏東之旅」（ISBN：9784908474125）の続編として、昭和十五年（一九四〇年）の台湾・宜蘭での記録を翻刻したものですが、冊子としてではなく、PDF 形式による簡装版としました。

カバラン二六〇〇　※PDF 版は無償提供

発行者　松尾 寛　　発行所　銀聲舎出版会　http://fallinland.mods.jp/ginseisha　　発行日　2020 年 4 月 29 日